

多治見方言における
1 拍音節の時間長についての予備的分析

安 藤 智 子

富山大学人文学部紀要第 69 号抜刷

2018年8月

多治見方言における 1拍音節の時間長についての予備的分析

安藤 智子

0. 本稿のねらい

多治見市を含む岐阜県南東部（東濃地方）の方言は、中輪式あるいは内輪式の東京式アクセントを持ち（山口 2003, 安藤 2015, 2016a, 2017）。アクセント核（下げ核）の位置と有無が弁別的であるという点で、東京方言ならびに共通語等のアクセントと同じである。しかし、語頭からのピッチの上昇のタイミングや、ピッチの上昇・下降の幅などにおいて、共通語とは異なり、尾張方言について指摘されているのと近い特徴を持つとみられる。

本稿では、多治見方言の語頭（より正確には韻律語初頭）における韻律的特徴のうち、拍の長さについて検討し、イントネーションを含めた韻律的特徴を分析するための足掛かりとする。

1. 研究の背景

1.1 日本語の拍

日本語の中にもモーラ方言とシラビーム方言がある（柴田 1962）。モーラ方言は1つの音節 (syllable) が複数のモーラ (mora) に分かれることがあるが、シラビーム方言はそれがないとされる。シラビーム方言の分布は柴田 (1962: 143) によれば「東北地方（おそらく北奥方言の地域で、北海道の一部を含む）から、あるいは北陸にかけての地方と、遠く南の宮崎・鹿児島両県から南島へかけての地方」に限られている。その位置から多治見方言はモーラ方言に属するとみられる。また、母音の長短の弁別性やアクセントから見ても、多治見方言はモーラ方言の性質が東京方言と同等かそれ以上に強いといえる¹⁾。

モーラ方言において、音韻意識のうえでは各モーラの長さは等時的であるとされ²⁾、この意味でモーラは「拍」とも呼ばれる。それぞれの拍を構成する分節音の持続時間は、調音方法などの要因によって本来的に異なるが、拍の長さを一定に近づける方向で、例えば摩擦音などの長い子音を頭子音とする拍の母音は短めになるなど、代償的な調整が生じるとの主張がある³⁾（Han 1962, Homma 1981 他）。自然発話についても音声コーパスの分析によって、子音と後続母音の持続時間に負の相関があり、代償的調整の傾向があることが確かめられるようになっていく（Kawahara 2017）。また、各拍の長さの違いはあっても、拍数と語の長さの相関性が高いという指摘もなされている（佐藤 1995）。

一方、実際の拍の長さが必ずしも常に同程度であるとは言えないことも知られている。拍の

長さの変動に関わる要素として、まず、単純な CV 拍のほかに、撥音・促音・引き音といった特殊拍を含む重音節（2 拍音節）が必ずしも CV 拍の 2 倍に相当する長さではないことが明らかになっている（Hoequist 1983, Sato 1993 等）。また、各拍を構成する分節音の長さについていえば、その音自体の性質や拍内での代償的な調整だけでなく、近隣分節音の種類、文や語といった領域内での位置、各拍が含まれる韻律語を構成する拍数などにも影響を受けることがわかっている（Kaiki, Takeda & Sagisaka 1990, Kaiki & Sagisaka 1992, Minagawa, Kagomiya & Maekawa 2003, 匂坂他 2006）。

このうち、文などの領域内での分節音の位置と持続時間の関係については、匂坂他（2006）において、母音時間長の変化に対する許容度が、文節頭、文節中、文節末の順で低下するという実験結果が示されている。また、同書において、読み上げ音声の各区分末では、区分頭・区分中に比べて母音時間長のばらつき（実測値と条件ごとの期待値との差の標準偏差）が大きいということが指摘されている。さらに Minagawa, Kagomiya & Maekawa（2003）では、自然発話で特に話速が遅い場合に、句末の 1 拍音節やその母音が長くなるのに対し、句末以外では話速による変動が小さいことが指摘されている。

ただし、拍の長さに関するこれらの詳細な研究は基本的に共通語もしくは首都圏方言が対象であり、別の地域のモーラ方言にもその結果が当てはまるかどうかは不明である。また、単語や文章の読み上げと自然発話では後者のほうが拍の持続時間にばらつきがあることが予想されるが、基本的に話しことばである方言の特徴を見出すには、自然発話のデータを採用する必要がある。先行研究は「日本語話し言葉コーパス」(国立国語研究所)のような自然発話を含むデータを用いた分析もなされてきてはいる（Minagawa, Kagomiya & Maekawa 2003, Kawahara 2017 等）が、数の上では読み上げのデータが中心であり、方言資料と十分に直接比較できるデータの分析がまたれるところである。

1.2 語頭の拍

多治見市に隣接する守山・高蔵寺（尾張方言）のアクセントについて、前川（1957）に、終止形が 2 音節で平板式アクセントを持つ五段活用動詞（同書の用語では「尾高平型」アクセントの「四段活用」動詞）の過去形（例：「置いた」）のアクセントが、成人と子供で異なるとの指摘があり、それについて次のような記述がある。

最初尾張へはいった時に、第一音節がやや長くなっていると感じたのであるが、実は守山・高蔵寺の例から見ても $\overline{\text{〇〇}}\text{〇} > \overline{\text{〇〇}}\text{〇}$ の変化である。（前川 1957: 217）⁴⁾

この中で、「第一音節がやや長い」という点に着目する。前川（1957）では、京阪式の「名が、葉が」

を「ナーガ、ハーガ」と発音することを「一音節分延ばす」と表現するなど、「音節」という用語が等時的単位としての拍の意味で用いられている。すると、「第一音節がやや長い」とは、本稿の用語法で言えば「1拍目がやや長い」という意味だということになる。また、「第一」というのは語頭もしくは文節などの頭という意味であろうが、これが語頭等の1拍音節だけに当てはまるのか、2拍音節の1拍目にも当てはまるのかは明らかではない。ただ、2拍音節についての記述が特にないことから、おそらく一般的な1拍音節についての指摘であろうと考えられる。

尾張で語頭等の1拍音節がやや長いという指摘だとすると、上記の匂坂他(2006)やMinagawa, Kagomiya & Maekawa(2003)による共通語音声の位置による持続時間の変動についての指摘とは異なる性質が尾張方言に見られるということになるが、これは尾張方言だけでなく、多治見方言にも当てはまるように感じられる。感情的な発話における拍の伸長は共通語等でも珍しくないが、多治見方言では感情的な発話は言うまでもなく、比較的冷静な発話においても、これまで筆者が調査で聞いた自然発話では語頭1拍音節に伸長が比較的多くみられるという実感がある。文字化しようとする、長音記号「ー」を入れるかどうか迷う場合があるほどである。そこで、モーラ方言である多治見方言において、モーラリズムからの逸脱の幅がどの程度のものであるかを、語頭を中心に確かめてみたい。ただし、語頭といっても、文や節の初頭にある語の初頭と、節内で他の語に先行される語の初頭などでは、違いがあることも考えられるので、これを区別して分析を行う。

2. 調査概要

2.1 録音データ

方言における自然な発話の韻律を調査するためには、できるだけ自発的な会話を分析することが求められる。そこで、自然でありながらある程度の統制の取れた会話音声のデータを得るため、国立国語研究所(1987)の方言談話資料を参考に、8種類の場面設定で会話を当該方言話者に依頼した。これらは今後の分析で比較の材料となるが、本稿ではそのうち、比較的冷静な会話が展開される、「品物を借りる」場面の会話を分析対象として予備的な考察を行う。

本項で扱う場面のデータについては、場面設定と会話の流れとして、以下のとおり方言話者に依頼した。実際には依頼した内容から外れた点もあったが、自然な会話を得ることが主眼であるので、そのまま利用することにした。

[場面設定と会話の流れ]

場面：品物を借りる

- ・隣人同士の男性2人
- ・朝食前の時間

・□□さんが、●●さんの家をたずねて、物を借りるときの話し方。

会話の流れ

- ① □□さんが、●●さんの家にやってくる。
家に入るときのあいさつを言う。
(時刻は朝食前)
- ② ●●さんが出てくる。
□□さんは、●●さんに、道具を貸してほしいと言う。
(はしご、台車、金づち、自転車、桶など)
- ③ ●●さんは、□□さんに、道具を何に使うのか、たずねる。
- ④ □□さんが、答える。
- ⑤ ●●さんは、道具を貸すことにして、□□さんを、道具のある所へ案内する。

話者は表1の2組4名である。青年～壮年期に数年の外住歴はあっても、言語形成期を含めて多治見市内に長年居住しており、現在の居住地で少なくとも半生を過ごしてきた方々である。調査時期が30年以上ずれているが、国立国語研究所(1987)がこの場面設定に想定した、老年層の男子2名という条件には合致している。実際には住居が隣り合うという意味での隣人同士ではないが、それぞれ近隣に住む親しい関係である。組名は現居住地域の小学校区名による。小泉校区は土岐川右岸側にある旧可児郡小泉村の南部にあたる、閑静な地域である。養正校区は土岐川左岸に位置し、旧土岐郡多治見町の東部で多治見市役所の近辺である。生年や居住地、外住歴からは、小泉組のほうが養正組よりも伝統的な方言を保っていることが予測されるが、今回は小規模な調査であり個人差の可能性を排除できないため、こうした観点からの比較は行わない。小泉組の録音はB氏宅、養正組の録音はC氏、D氏の近隣の協力者宅において、2018年2月に実施した。

表1 話者

組	役割	発話者	生年	生育地	現居住地	外住歴
小泉	□□	A	1939年	錦町	幸町	なし
	●●	B	1928年	小泉町	小泉町	33～36歳時愛知県稲沢市
養正	□□	C	1949年	中町	中町	18～22歳時東京、22～25歳時岐阜県揖斐郡坂内村(現、坂内町)
	●●	D	1945年	笠原町	明治町	29～34歳時愛知県名古屋市

録音にはICレコーダー(Ediroll R-05)を用い、WAV形式で保存した。録音時間は小泉組で約27秒、養正組で約53秒である。

2.2 データの分析方法

得られた音声データに対して、音響分析ソフト Praat を用いて筆者がセグメンテーションを行い、各音の持続時間を測定することにより、各音節の長さを測定した。ただし、間投詞やフィラーに当たる音声は、定常的な発話のリズムから逸脱しがちであるため、分析から除外した。また、二人の音声重なって明瞭なセグメンテーションができない部分は、計測を断念した。

セグメンテーションの際、特に境界の画定に注意が必要なのが、(i) 母音間ないし母音と接近音との境界と、(ii) 重子音（促音+阻害音、撥音+鼻音）を前の音節末尾音と後ろの音節頭子音とに分けようとする場合の境界である。

(i) では、異なる母音の連鎖もしくは母音と接近音の連鎖において、ポーズ・インテンシティの減衰-漸増・声門閉鎖に対応する雑音のいずれかがみられる場合はそれを境界とし、これらの手掛かりがみられない場合は、フォルマントの移行部分の中央時点に最も近いゼロクロス⁵⁾を境界とした。前の母音と後ろの母音が同じ音素の連鎖においては、ポーズなどを挟まず連続している場合は、母音の中央時点に最も近いゼロクロスとした。もし、当該方言において頭子音の有無が母音の長さにより代償されて拍の長さが一定に保たれる傾向があるとすると、前後が同じ母音音素の場合、この方法では頭子音を持たない後ろの母音が本来より短めに算出されることになるが、その点を踏まえて考察を行う。母音と接近音との境界や、その他の性質の近い音の境界は、原則として藤本・菊池・前川(2006)の方針に従って境界を決定した。

(ii) の促音、撥音の場合については、藤本・菊池・前川(2006)の「融合ラベル」に当たるものとして、「Qt」「Nn」のような分節を行い、計測の際に、融合区間の持続時間を単純に1/2にして、前半を前の音節の末尾、後半を後ろの音節の初頭として音節長を計算した。実際には、促音ないし撥音に当たる部分は音節頭子音よりも長いと考えられる⁶⁾ので、この計算方法をとることで、本来よりも後ろの音節の方が長く算出されることになるが、方言の自然発話においてどの程度の長さの差があるかを算出する根拠がないため、仮にこのようにしておく。

また、無声音が有声化しているものなど、様々な異音が見られるが、その区別は行わず、音素としての長さを計測する。あるべき音の脱落については、その分節音の持続時間を0として扱う。

3. 分析結果

分析した音節数および拍数別の音節長は、表2のとおりである。なお、1音節が音声的に長くなる場合はあったが、語彙レベルで3拍以上の音節は出現しなかった。例えば、呼びかけの際に敬称の接尾辞「-さん」を付けて「○○サーン」と長呼する場合の「サーン」は語彙レベルでは「サン」/saN/として2拍音節とした。節末の要素が「～モンデー(=～から(理由))」のように延伸する場合もあるが、発話態度や話速によって延伸しない「～モンデ」という形態

が通常観察されることから、語彙レベルで「デ」/de/ は1拍音節とした。

表2 データ中の音節数と平均音節長 (ms = ミリ秒)

組	話者	1拍音節数	平均音節長	2拍音節数	平均音節長	音節数計
小泉	A	45	144.0ms	12	179.0ms	57
	B	34	152.7ms	10	235.6ms	44
養正	C	81	165.0ms	30	213.9ms	111
	D	54	147.6ms	17	289.5ms	71
	計	214音節	154.3ms	68音節	229.2ms	282音節

2拍音節の長さは、話速による変動が大きく、長母音を持つもの、撥音や促音を持つものといった2拍めの要素の違いにも左右されることが、共通語等の先行研究 (Han 1962, Homma 1981, Minagawa, Kagomiya & Maekawa 2003 等) から予測されるため、今回の小規模なデータで扱うには適さない。よって、以下では、モーラリズムの基本となる1拍音節の長さを比較することにする。

1拍音節の長さの平均値と標準偏差は、節と韻律語の初頭音節と末尾音節、それ以外の中間の音節に分けると、表3のとおりとなる。ここでは、節としては、文法的な節のほかに、言い淀みがあった場合など、ポーズが前後に入った部分は節とみなしている。ここでの韻律語は、ほぼ学校文法でいうところの文節に当たり、自立語単独もしくは自立語に付属語 (助詞、助動詞のほか、形式名詞や補助動詞を含む) が接続したまとまりを指す。韻律語は、アクセント型として平板式あるいは一つのアクセント核を持つ起伏式である場合が多いが、一つの韻律語が2つ以上のアクセント核を持つ場合も存在する (安藤 2016b)。

表3 1拍音節の位置別音節長（上段：音節数，中段：平均音節長，下段：標準偏差）

話者	節 初頭音節	非節初頭韻律語 初頭音節	節 末尾音節	非節末尾韻律語 末尾音節	中間音節
A	5 音節 147.2ms S.D. 18.35	4 音節 140.5ms S.D. 33.81	7 音節 278.4ms S.D. 125.77	7 音節 165.1ms S.D. 65.64	21 音節 89.2ms S.D. 35.58
B	5 音節 159.4ms S.D. 47.76	6 音節 165.8ms S.D. 64.27	7 音節 204.5ms S.D. 110.21	5 音節 158.6ms S.D. 99.21	11 音節 106.9ms S.D. 33.18
C	7 音節 132.6ms S.D. 53.43	8 音節 107.5ms S.D. 58.21	13 音節 370ms S.D. 162.60	6 音節 298.0ms S.D. 183.52	46 音節 105.9ms S.D. 37.00
D	9 音節 136.3ms S.D. 50.15	7 音節 82.1ms (S.D. 45.09)	8 音節 298.9ms S.D. 129.70	9 音節 162.6ms S.D. 84.35	21 音節 111.9ms S.D. 39.32
計	26 音節 140.6ms S.D. 47.33	25 音節 129.68ms S.D. 62.05	35 音節 302.3ms S.D. 151.61	27 音節 192.6ms S.D. 126.39	101 音節 103.7ms S.D. 37.44

表3から、1拍音節について次のようなことが言える。

第一に、少なくとも中間音節は、自然発話としてはばらつきが小さく、モーラ方言としての性質を示していると考えられる。

第二に、いずれの組も、節末尾音節は平均して長い。これは、上述の「○○サーン」「～モンデー」のように延伸する場合が含まれていることによるものであろう。非節末でも、話者により韻律語末は長めの傾向があるが、これも各種のフィルターやポーズの代わりに格助詞等の末尾母音が延ばされることがあるためと考えられる。これらの末尾音節（特に節末尾音節）は、標準偏差から、長さのばらつきが大きいこともわかる。

このことは、1.1節で紹介した句坂他(2006)による、日本語の文節末では母音時間長の変化に対する許容度が高く、読み上げにおける各区分末で母音時間長のばらつきが大きいという指摘に合致する。また、Minagawa, Kagomiya & Maekawa (2003)において、特に話速が遅い場合にだが、共通語の自然発話において句末の1拍音節やその母音が長いと指摘されていることとも整合性がある。上記の結果から、多治見方言においても、末尾音節はモーラリズムから解放された位置であると言えよう。よって、モーラリズムを念頭に1拍音節長を比較するうえで、末尾音節は除外して考えるべきであると思われる。

第三に、いずれの話者も、節初頭音節が中間音節に比べて長い。これは2.2節で紹介した尾張方言についての前川(1957)の記述から読み取れる特徴と一致すると言える。

一方、非節初頭韻律語初頭音節には結果にばらつきが見られる。小泉組（話者A, B）では非節初頭韻律語初頭音節も中間音節に比べて長い、養正組では、その差が小さい（話者C）か、

むしろ短い（話者 D）。この理由について、今のところ、次の3つの可能性が考えられる。

一つには、単に個人差、あるいは地域差や年代差を反映しているという可能性である。仮に小泉組の方がより典型的な方言を話しているとする、そのことにより初頭音節の延伸の傾向がより強く、節初頭だけでなく、非節初頭の韻律語でも初頭音節が延伸しているということが考えられる。しかし、今回の人数ではそれについて明言することはできない。

二つ目の可能性は、アクセントの影響である。Minagawa, Kagomiya & Maekawa (2003) では、アクセントがある場合に音節が長くなることが指摘されている。表4では、1音節目(=1拍目)から2音節目にかけてピッチの急激な下降が見られる頭高型のアクセントをとる場合と、それ以外の非頭高型アクセントをとる場合とで初頭音節の長さを比較している。話者のいずれかに非節初頭韻律語初頭音節でアクセント核を担う頭高型が多く、その影響で話者によって音節長平均に違いがある、という可能性が考えられる。

表4 韻律語初頭音節の平均長とアクセント

組	話者	節初頭音節		非節初頭韻律語初頭音節	
		頭高型	非頭高型	頭高型	非頭高型
小泉	A	1音節 152ms	4音節 146.0ms	—	4音節 140.5ms
	B	1音節 146ms	4音節 162.8ms	1音節 135ms	4音節 153.0ms
養正	C	—	7音節 132.6ms	3音節 60.3ms	5音節 135.8ms
	D	1音節 119ms	8音節 134.4ms	2音節 104.5ms	5音節 73.2ms
	計	3音節 139.0ms S.D. 14.35	23音節 140.8ms S.D. 50.05	7音節 104.4ms S.D. 50.88	18音節 129.8ms S.D. 65.70

今回のデータでは特に頭高型の語数が少ないため、十分に比較することができないが、表4から、どちらかと言えば、非頭高型のほうが初頭拍が長めになっている⁷⁾。Minagawa, Kagomiya & Maekawa (2003) の結果とは食い違いますが、データを増やして再検討する必要がある。

三つ目の可能性は、語頭音節の頭子音の有無である。頭子音の有無とそれぞれの音節長の平均を表5に示す。頭子音ありの列の下段の丸括弧内は、子音長平均：母音長平均 (ms) である。

表5 韻律語初頭音節の平均長と頭子音の有無

組	話者	節初頭音節		非節初頭韻律語初頭音節		中間音節	
		頭子音あり	頭子音なし	頭子音あり	頭子音なし	頭子音あり	頭子音なし
小泉	A	3音節 141.7ms (45:97)	2音節 155.5ms	4音節 140.5ms (41:99)	—	21音節 89.2ms (27:62)	—
	B	3音節 164.3ms (50:115)	2音節 152.0ms	4音節 186.8ms (54:133)	2音節 124.0ms	106.9ms (38:69)	—
養正	C	5音節 150.8ms (62:89)	2音節 108.5ms	3音節 142.3ms (66:76)	5音節 86.6ms	47音節 105.9ms (54:106)	—
	D	4音節 152.2ms (72:81)	4音節 108.3ms	3音節 124.0ms (56:68)	4音節 50.8ms	20音節 113.3ms (52:62)	1音節 84ms
	計	16音節 149.4ms S.D. 53.55	10音節 126.5ms S.D. 30.24	14音節 150.6ms S.D. 48.59	11音節 80.4ms S.D. 54.64	99音節 104.0ms S. D. 37.76	1音節 84ms

表5から、特に養正組の頭子音なしの非節初頭韻律語初頭音節が短いことがわかる。このことと、頭子音なしの出現割合が小泉組に比べて高いという偶発的な事情によって、頭子音なしの非節初頭韻律語初頭音節全体の平均が短くなっている。頭子音なしの非節初頭韻律語初頭音節の全11例を含む発話を以下に示す。スラッシュは節の境界またはポーズを示し、スペースは韻律語の境界を示す。下線部が頭子音のない非節初頭韻律語初頭音節である。数字は当該音節 (= 母音) の持続時間 (ms) を示す。

- B: ホンナラ ホコノ ウラノ トコニ／アルデ／マー オチンヨーニ タノムゼンテ
51 197
- C: ソー ナガー ヤツワ イランケドモ／ニカイモ ウチワ アルワケヤ ナーモンデ／
181 95 49
- サンヨンメートルグライ アレバ イーカナツチューフーヤ／
65
- [ト オ]モットルヤケドノー
43
- D: サガシニ イコカ／アノ ウラ イケバ／アル [ト オ]モウデ
43 32 88 40

これらの事例の中で、一般に持続時間が短い (Campbell 1992) とされる狭母音が特に多いと

いうわけではない。この少量のデータから今のところ考えられる、非節初頭韻律語初頭で頭子音のない音節が短いことの原因として、以下の3点が挙げられよう。

一つ目に、共通語では子音と後続母音の間で持続時間の補償的調整が起きていると言われるのに対し、多治見方言の自然発話においては頭子音がない拍の長さを母音によって補う調整が生じていない可能性がある。表5丸括弧内の頭子音：母音の平均からは、必ずしも頭子音のある音節とない音節で母音のみの長さが影響を受けているかどうかは判然としないが、これはさまざまな子音をまとめて扱っているためでもあろう。この可能性については、中間音節（語中）のデータが多い談話資料を含めて考察してみる必要がある。

二つ目に、セグメンテーションの方法として、前の韻律語の末尾の母音 (a) と後ろの韻律語の初頭の母音 (b) が同じでフォルマントが遷移せず、境目が見いだせない場合に、その連続する母音を単純に等分したこと (2.2 (i) 参照) が挙げられる。それにより、(a) を含む音節は頭子音が付いていてその分長いのに対し、(b) は頭子音がない分短い音節となっている、ということも一部にはあるであろう。この母音を等分する処理をした箇所は、上の事例の中で [] で囲んで示している。しかし、このような処理をしていない、境界の明確な母音連続においても頭子音がない場合には短い例が見られることから、引き続き検討の必要がある。

三つ目に、頭子音のない語頭の母音が、先行する語の末尾の母音とともに母音連続をなす場合に、多治見方言において縮約しがちであるという可能性が考えられる。当該地域の方言語彙集である土屋千春編 (1957) および多治見ことば編集委員会編著 (1974) において、次のような例が見られる。

- ミニク 「見に行く」
 ツウタルク 「ついて歩く」
 ドイトレ⁸⁾ 「どいておれ」
 コナアダ 「この間」
 チコンキ 「蓄音機」

このほか、スエタル「据えてある」、イカナカン (<イカナアカン)「行かなければならない」など母音で始まる補助動詞や機能語が付く場合も、補助動詞・機能語の前に来る母音が脱落する現象が頻繁に観察される。これらの例ではカナで書く際に1拍分脱落することが意識されるほどに明確に母音が縮約していると言える。もっとも、これらの現象は、韻律語の内部（中間音節）におけるものであり、脱落しているのは前の形態素の末尾の母音であって、韻律語の境界において後ろの語の初頭母音が短くなるという今回の結果とは別の現象である⁹⁾。しかし、母音連続が生じたときにモーラリズムが崩れやすくなるという点では共通性がある。

また、このほか、前述の方言語彙集では、ミヤイ /mijai/ (</miai/)「見合い」のように接近音の挿入によって母音連続を避ける例も散見される。こうした母音連続に関する現象は、共

通語的な口語においても、「歩いていく」>[aruitekui] (/i/の脱落), 「どいている」>[doitero] (/i/の脱落), 「この間」>[konaida] (/o/の脱落), 「場合」/baai/[bawai] (接近音/w/の挿入)等の例があり, この方言特有の現象というわけではない。しかし, 東濃西部方言では2つ目の母音が/i/の母音連続が長母音化する現象も, 母音連続の回避という点で共通しており, 母音連続とリズムの関係について留意していきたい。

4. まとめ

本稿では, 多治見方言のプロソディの特徴を明らかにするための手掛かりとして, 初頭1拍音節の長さを中心に少数のデータの分析を試みた。扱ったデータの範囲では, 予想どおり, 尾張と同様に初頭音節(特に節初頭音節)の延伸が観察された。このことと, 尾張などについて指摘されているイントネーションの「遅上がり」の現象との関係について, 引き続き分析を行ってきたい。また, 尾張周辺以外の共通語その他のモーラリズムを持つ方言の中で, 初頭音節と中間音節の長さに差が見られることがあるのかどうかについても, 当該地域の方言の特徴を論じるうえで確かめておく必要がある。

一方, 非節初頭の韻律語初頭音節については, 節初頭音節と同様に延伸する例もあれば, かって中間音節より短いものも見られた。これは頭子音の有無との相関が強いように思われるが, 話者の特性やアクセント核の有無などと合わせて, データを増やして分析する必要がある。

最後に, 本調査に御協力いただいた調査対象者の皆様に, 心より御礼申し上げたい。

資料

(話者の交替以外の個所でポーズが入った箇所および節の境界をスラッシュ(/)で示す。節境界以外の韻律語境界はスペースで示す。声の重複などによって分析不可能な部分や, 間投詞等の分析から除外した箇所は, 丸カッコに入れて示す。話者の姓・名は記号で示す。)

小泉組

A: B サ

B: (へー)

A: ハシゴ カートクレンカヤ

B: ドヤ/ハシゴ カシテ/ナニ ヤルヤ

A: (うーん) /アスコノ チョット キガ キリターデ/チョコット ノボルデ/ハシゴ
カートクレ

B: (アー) /アーホーカ/ホンナラ/ホコノ ウラノ トコニ/アルデ/モッテカンショ

A: (へい) /ホータラ カリテクゼン

B: (へー) /マー オチンヨーニ タノムゼンテ

A: (へー) /ホンナラ/キョー (イチンチ) カートットクレヤ

B: [笑い声]

共通語訳

A: Bさん。

B: はい。

A: 梯子を貸してくれないかね。

B: なんと。梯子を貸して、何をするんだ。

A: ええと、あそこの、ちょっと、木が切りたいから、ちょっと登るから、梯子を貸してくれ。

B: ああ、そうか。それなら、そこの裏の所にあるから、持っていきなさい。

A: はい。そうしたら、借りていくよ。

B: はい。とにかく落ちないように頼むよ。

A: はい。じゃあ、今日一日貸しておいてくれよ。

養正組

C: オハヨーゴザイマス

D: オハヨーゴザイマス/Cサン キョー ナンカ アツタ

C: (ウン) /チョットネ/タノミゴトガ アツタンヤケドモ/ (アノ) /

D: (ハー)

C: モーシワケナイケドモ/ (マー) /アツタラ/ハシゴ カシテモラエンヤローカ

D: ハシゴ/ハシゴッテ/ドノグラノー ナガサナ ヤツガ/ (イ) /ホシーノ

C: (ウン) /ソー ナガイ ヤツワ イランケドモ/ (アノ)

D: (ア)

C: ニカイモ ウチワ アルワケヤ ナーモンデ/ (エー マー ア) /ナンメートルカナ/

(エット サン ウン) /サンヨンメートルグライ アレバ イーカナッチューフーヤ/ト

オモットルヤケドノー

D: (アー) /ホントー/ホンナラ イッペン チョット (ミ) /アレ サガシニ イコカ

C: (ウン)

D: アノ ウラ イケバ/アルト オモウデ

C: アホカナ/ (ジャ) /タノミマス

共通語訳

C: おはようございます。

D: おはようございます。Cさん、今日何かあった？

C: うん、ちょっとね、頼みごとがあったんだけど。

D: はい。

C: 申し訳ないけど、梯子があったら、貸してもらえないだろうか。

D: 梯子？梯子って、どのくらいの長さのものが欲しいの？

C: うん、それほど長いものはいらないんだけど

C: うちは二階があるわけでもないから、まあ、何メートルかな、ええと、3…3, 4メートルくらいあればいいかなというところだと、思っているんですけどね。

D: ああ、そう。それなら一度ちょっと、あれを探しに行こうか。

C: うん。

D: あの裏に行けば、あると思うから。

C: そうですか。じゃあ、頼みます。

注

- 1) 母音の長短の区別などの特徴については、多治見方言と東京方言に違いはない。ただし、/ai/, /oi/, /ui/ の母音連続が長音化するため、チカー「近くない」対チカーナー「近いなあ」、トナー「遠くない」対トナーナー「遠いなあ」のように、東京方言にないところで長さによる弁別が行われることがある。アクセントに関しては、例えば、ト[´]ー[´]ー「遠い」、[´]オー[´]タ「置いた」など、特殊拍にアクセント核が置かれる場合が東京方言に比べて生じやすい（安藤 2016a）。
- 2) 神保（1927）は CV（子音＋母音）の単位を仮に音節と呼び、これが「凡そ同じ位の長さに発音される」、
「音聲表象によれば（…中略…）皆同じ長さといふ意識を伴つてゐる」（p. 370）と主張している。ここでいう「音聲表象」とは、「吾々が幼い時から周囲の人々の口に發する無数の實地音聲を聴き、一々の印象を心の中に蓄積し、「重ね寫眞」を取る様に細かい差別を消しすべてに共通な部分を残したもの」（p. 371）と説明されている。
- 3) 子音と後続母音との長さが負の相関を示すことを代償的な調整と捉えた主張であるが、これに反する分析も見られる（Beckman 1982）。また、モーラ以外のリズムを持つ言語においても同様の相関がみられる例も挙げられており（大竹 1988, 1989）、この相関関係がモーラリズムの基盤として機能しているのかどうか、疑問視する主張もある（Warner & Arai 2001）。
- 4) ここで指摘されている変化は、ピッチの下がり目に関するアクセントの変化であり、第一音節の長さとの関係について何を述べようとしているのか、読み取り難い。尾張方言では「置いた」の連母音 /oi/ は [ø:] となるとも指摘されていることから、「長くなっている」とは「連母音が融合同化し長母音化している」、すなわち 2 モーラであることは変わらない、という意味の可能性もあるが、ここでは、「『置いた』 [ø:ta:] の高いところは 1 拍分としては長い、これは尾張特有の長めの 1 拍目が高くなった頭高型なのではなく、融合同化し長母音化した 2 拍目まで高かったのである。それが子供の世代では 2 拍目で下がるようになった。」という意味と解釈する。
- 5) 波形グラフの音圧 0 の軸と波形とが交差する時点を指す。

- 6) Campbell & 匂坂 (1991) の共通語の読み上げ音声によるデータによれば、重子音（促音あるいは撥音+音節頭子音）は単子音（音節頭子音）の約3倍の長さがあるという。
- 7) 話者Cの非節初頭韻律初頭音では頭高型平均が60.3msと特に短い、次に検討する頭子音のない例が3語中2語を占めることの影響が大きいと考えられる。同様に話者Dの非頭高型平均も73.2msと短い、頭子音のない例が5語中4語を占める。
- 8) ただしドートレ /doRtore/ と発音されることも多い。これらの方言集の母音連続の記述方針は一定でないとみられる（安藤 2013）。
- 9) 今回のデータの中で唯一の頭子音のない中間音節は、「オモウ（思う）」の「ウ」であり、音声的には二重母音の後半とみなすことも可能な音である。ここで検討している文献中の例は、複合名詞の後部要素や補助動詞の初頭の音節であって、この「ウ」に比べれば自律性が高いものであるという点で、中間音節同士の直接の比較の対象にはならない。

付記

本研究はJSPS 科研費JP16K02622の助成を受けたものである。

参考文献・資料

- 安藤智子 (2013) 「多治見方言における連母音の長母音化について」『富山大学人文学部紀要』58: 23-60
- 安藤智子 (2015) 「多治見方言における名詞のアクセント」『富山大学人文学部紀要』62: 23-58
- 安藤智子 (2016a) 「多治見方言における動詞のアクセント (1)」『富山大学人文学部紀要』64: 39-69
- 安藤智子 (2016b) 「東京式方言アクセントの記述－多治見方言の場合－」日本音韻論学会編『現代音韻論の動向』開拓社 pp. 62-65
- 安藤智子 (2017) 「多治見方言における形容詞のアクセント」『富山大学人文学部紀要』66: 17-29
- 大竹孝司 (1988) 「アラビア語と日本語における補償効果」日本音声学会編『音聲學會會報』189: 19-24.
- 大竹孝司 (1989) 「言語のリズムと補償効果」日本音声学会編『音聲學會會報』191: 14-19.
- 国立国語研究所 (1987) 『方言談話資料 (9)－場面設定の対話－』国立国語研究所資料集 10-9
- 匂坂芳典・武藤牧子・加藤宏明・津崎実 (2006) 「音韻時間長の変化に対する知覚特性の分析」広瀬啓吉 編著『韻律と音声言語情報処理』丸善 pp. 43-50
- 佐藤ゆみ子 (1995) 「日本語のモーラリズム－音節数と単語長の間の相関関係－」『音聲學會會報』209: 40-53
- 柴田武 (1962) 「音韻」国語学会編『方言学概説』武蔵野書院 pp. 137-161
- 神保格 (1927) 「國語の音聲上の特質」東京大学國語國文學會編『國語と國文學』4 (4) : 363-376
- 多治見ことば編集委員会編著 (1974) 『多治見を中心とした土岐方言集』多治見市教育研究所
- 土屋千春編 (1957) 『多治見のことば 多治見地方の方言』多治見市教育研究所
- 藤本雅子・菊池英明・前川喜久雄 (2006) 「分節音情報」『日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所 pp. 323-346
- 前川秀雄 (1957) 「尾張方言と三河方言の対立に関する研究」日本音声学会編『音聲の研究』8 千代田出版印刷 pp. 209-222
- 山口幸洋 (2003) 『日本語東京アクセントの成立』港の人
- Beckman, Mary E. (1982) Segment duration and the 'mora' in Japanese. *Phonetica* 39: 113-135.
- Campbell, Nick. (1992) Segmental elasticity and timing in Japanese speech. in *Speech Perception, Production And Linguistic Structure*, eds by Y. Tohkura, E. Vatikiotis-Bateson & Y. Sagisaka. Ohmsha, IOS Press. pp. 403-417.
- Campbell, Nick & 匂坂芳典. (1991) Moraic and syllable-level effects on speech timing. 「音声タイミ

- ングに見られるモーラと音節の影響について」電子情報通信学会『電子情報通信学会技術研究報告』SP90-107: 35-40
- Han, Mieko Shimizu. (1962) The feature of duration in Japanese. 日本音声学会編『音聲の研究』10: 65-80.
- Hoequist, C. Jr. (1983) Durational correlates of linguistic rhythm categories. *Phonetica* 40: 19-31.
- Homma, Yayoi. (1981) Durational relationship between Japanese stops and vowels. *Journal of Phonetics* 9: 273-281.
- Kaiki, Nobuyoshi, Kazuya Takeda and Yoshinori Sagisaka. (1990) Statistical analysis for segmental duration rules in Japanese speech synthesis. *ICSLP 1990*: 17-20.
- Kaiki, Nobuyoshi and Yoshinori Sagisaka. (1992) The control of segmental duration in speech synthesis using statistical methods. *Speech Perception, Production And Linguistic Structure*. eds. by Y. Tohkura, E. Vatikiotis-Bateson and Y. Sagisaka. Ohmsha, IOS Press. pp. 391-402.
- Kawahara, Shigeto. (2017) Durational compensation within a CV mora in spontaneous Japanese: Evidence from the Corpus of Spontaneous Japanese. *J. Acoust. Soc. Am.* 142 (1) : EL143-149.
- Minagawa, Yasuyo, Takayuki Kagomiya and Kikuo Maekawa. (2003) Durational variations of Japanese long / short vowels in different speaking rates: analysis of a spontaneous speech corpus. *15th ICPHS Barcelona*: 2127-2130.
- Sato, Yumiko. (1993) The durations of syllable-final nasals and the mora hypothesis in Japanese. *Phonetica* 50: 44-67.
- Warner, Natasha & Takayuki Arai. (2001) Japanese mora-timing: a review. *Phonetica* 58: 1-25.

